

念仏者の智慧

教育者(長崎県教育長、高等学校長歴任)であり、また篤信の念仏者であられる竹下哲先生の著書『いのちに出会う旅』の中に次のようなお話が紹介されていました。

先日私はある若い奥さんから一通の手紙を頂きました。その手紙には八十五歳になるお姑さんと一緒に暮らしていかなければならない悲しみが、切々と綴られていました。お姑さんはことごとくに嫌味を言って、その奥さんを困らせるのだそうです。

私は思わずペンを取って返事をしたためました。

お姑さんとの問題、大変ですね。お気持ちはよく分かります。しかし、嫌味を言うのも、お姑さんの業なのです。誰も好きで嫌味を言うものはいません。悲しい業縁がそうさせているのです。

その「業」というのを、私は人生の舞台におけるその人の「役割」というふうに了解しています。

人々すべてが、自分の役を一生懸命に演じている「役者」ではないでしょうか。

舞台の役ですからみんなから好かれる役もあれば、憎まれる役もあります。それぞれの役を、みんなが汗を流して演じているのです。

それを思えば本当にご苦労さまと声をかけたくくなります。

あなたのお姑さんも、嫌味を言うという「憎まれ役」を一生懸命に演じているのではないのでしょうか。

どうかそういう目で、お姑さんを見つめなおして下さい。

すると、また見方が変わってきて、あなたのお気持ちも少しは楽になるのではないのでしょうか。

ひるがえって思えば清沢満之先生は、「如来はなんじがために必要なものを、なんじに賦与したるにあらずや」とおっしゃっています。

この言葉の通り、「お姑さんの嫌味」もあなたに必要なのです。

あなたの心の目を開くために必要だから、如来は「お姑さんの嫌味」をわざわざ与えて下さっているのです。

だからあなたは、「ああ、そうございましたか」と素直に如来のお与えをいただくことです。

そしてまた、その嫌味をいただくことが、この人生におけるあなたの役目でもあります。

その役に徹すること以外に、あなたの生きる道はありませんよ。

「気に入らぬ風もあろうに柳かな」です。柳は気に入らぬ風も、素直に受け止めています。

だから柳はしなやかで、強いのです。気に入らぬ風が柳を育てているのです。

「念仏」は気に入ることも、気に入らぬことも、素直に受け止める力と智慧を与えて下さいます。

お念仏を申しながら、賜った今日の一日を生きていってください……

お姑さんの嫌味に愚痴をこぼす奥さんに先生は「その嫌味はあなたの心の目を開くために必要なものです。だから、素直にいただきなさい」と仰っています。

この奥さんにすれば大変厳しい言葉ですが、これが念仏の教えによる解決方法です。

そうしてこの方法以外に、真の意味での解決はありません。

お姑さんの嫌味をいただくとは、手紙にあるように「ああ、そうございましたか」と頭を下げることです。

しかし、それが中々出来ないのです。

何故出来ないのか？

それは、彼女の心の中に「自分は間違っていない。自分は正しい。間違っとるのは姑の方だ」という思いがあるからです。

そこに大きな問題があるのです。

先生は、「あなたのその心が問題をこじらせているのですよ」と、教えているのです。

「自分は間違っていない。自分は正しい」という心の奥底にあるものを仏教では「我執」と言います。我執とは「自分が一番かわいい」「自分は正しい」「自分の思い通りにしたい。」「自分さえよければ」という心です。

何か問題が起きると、すぐに自分を正当化させ、相手の非を責める。

しかしそれでもなお思い通りにならないと、今度は一変して被害者面をして「あんなことを言われた、こんなことを言われた」と不平不満の愚痴をこぼしていく。

これが我執一杯に生きる私たちの姿です。

まことにお粗末至極であります。

ここで大事なことは「そんな我執一杯に生きる愚かな我が身に気づく」ということです。

気づけば「何と愚かな私なんだ」と頭が下がります。その頭が下がった時、私たちは愚かでありながら、愚かな自分を超越することが出来るのです。

しかし、自分の煩惱は自分で気づくことはありません。気づかせてくれるものがあるのです。彼女にとって、それが実はお姑さんなのです。

それまでお姑さんの嫌味を愚痴るばかりの彼女でしたが、先生の厳しい言葉に出会って自らの心を問い直したはずですが。

そうして「この私という人間は、そのようなお姑さんに出会わないと頭の下がらないほどしぶとい我を持った人間だった。まことにお粗末な嫁だ」と気づいたと思います。

そうして「そんなお粗末な私の姿を知らせてくれたのは他でもないお姑さんだった。

お姑さんこそこの愚かな私の心の目を開かすために此の世に来られた仏さまではなかったか」ということに目覚めるのです。

その時彼女の心の目は開かれるのです。

お念仏の教えは、こうして憎悪の対象でしかなかったお姑さんが実は仏さまだったといただいていく、そんな尊い世界を与えて下さるのです。

また先生は、「その嫌味をいただくことに徹する以外に、あなたの生きる道はありません」と仰っていますが、これは仏教で説く「因果の道理」に従って生きなさいと教えているのです。

つまり、彼女の現在の人生（境遇）は、他人から与えられたものでもなければ、偶然出来たものでもない。彼女自らが選びとって出来たものなのだということです。

ですから彼女の身に起きることはすべて彼女自身が自らの責任において果たしていかなければならないということです。

他に責任を転嫁したり、相手を非難することは筋違いだということになるのです。

まことに厳しい人生観ですが、こうして我が身に起きる一切のことを引き受け（これを宿業を引き受けると言います）自分が背負わねばならない荷物を背負って、精一杯生きていける身になったということが親鸞聖人の仰る助かったということだと思えます。

そうして、我が身が背負う荷物は私に必要であったから与えられたのだと頂く時、清沢満之師の「如来はなんじがために必要なるものを、なんじに賦与したるにあらずや」という言葉を心の底からうなずくことが出来るようになるのです。

妙好人として名高い足利源左さんは、どんな時でも、「ようこそ、ようこそ 南無阿弥陀仏」と喜んでいかれたと聞きます。

「私の身の上にどんな辛いこと、悲しいことが起きててもかまいません。なぜなら、そのすべてが阿弥陀さまのお救いを喜ぶ大事なご縁ですから」と語っています。

「お姑さんの嫌味を素直にいただく」という生き方と軌を一にするものです。

まさに、「我以外皆我諸仏」であります。

こうした念仏者の生き方を甲斐和里子女史（京都女子大創設者）は次のような歌にされています。

岩もあり 木の根もあれど さらさらと
たださらさらと 水の流るる

川の水は、岩や木の根っこなどの障害物があっても、その障害を避けるのでもなく、また反対に突っ張るのでもなく、川上から川下へと自在に流れていく。念仏者もまたこの風情であるという歌です。

いかなることも素直にいただき、それを恵みとして生きていく。そんなことを教えるお念仏のみ教えは、障害だらけのこの人生を歩む私たちの大いなる灯火になるものです。

平成27年12月 「光明寺だより90号」より